
Smokin' with JAZZ

n a k o s o

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Smokin' with JAZZ

【コード】

N2094D

【作者名】

nakoso

【あらすじ】

いらっしやいませ、喫茶店『Anny』へようこそ。本日ご用意しましたメニューは、ずばり「人探し」でございます。nakosoがご用意しました本日のメニュー、お気に召しますかどうか。お時間の許す限り、ご賞味いただければ幸いです。

01:「いらっしやいませ」

エリヤ「マルソーは、ちょっとした音にでも夢から離脱する。しかし彼の寝起きの悪さが、それを相殺してなお、釣を残しているのだった。」

まどろみに土足で踏み込む軽やかな足音^{リズム}を遮断するべく、彼は頭まで毛布を引き上げた。

「エリヤ！」

「ばん！」

戸の開く音と、高く丸っこい少女の声は容赦なく脳を揺さぶる。

「エリヤ、エリヤ！ エー、リー、ヤー！」

脳だけでは飽き足らず、体まで揺さぶる。

「……………うるさい」

強引に覚醒させられた脳にとって、やはり唇の神経を動かすのは重荷だったようだ。加えて頭まで毛布をかぶっているために、うなり声にしか聞こえない。

「エリヤー！」

馬鹿の一つ覚えもいとこだ。ひたすら名前を連呼し、ひたすら彼の身を揺らす彼女に対し、エリヤはひざを抱え込んで背を丸めた。

断固「起きません」。

または、「起きてたまるか」。

「起・き・ろーッ！」

毛布越しにでも鼓膜をつんざくに十分に足る叫び。とうとう毛布^{ハリケード}を剥ぎ取られた。温もりあったものがむしられ、部屋の冷たい空気がチャンスとばかりに身を包み込む。

「さむい」

舌っ足らずに苦悶を示しつつ、毛布を探して右手を伸ばす。健闘むなく、指先は空を切るばかり。すぐにあきらめたエリヤは、畜生、と罵りながら、より一層体を丸めた。

「いつまで寝てんの。もう朝だよ」

「知るか　いつて！」

「ごっ。拳骨で突かれた額が鈍く鳴る。」

「おっまえ…っ」

反論　>　苦悶。

額を押さえたエリヤの身が反る。信じらんないくらいに痛い。涙まじりに右目だけ開くと、彼から強奪した毛布を神経質なまでにきれいにたたむ少女が見えた。紺碧の瞳にかかる赤毛を首の付け根で結わいて、顎のラインがぎりぎりわかる程度の頬の膨らみ。首元には銀のクロスがぶら下がる。セーターにジーンズ姿の丈は142センチと記憶している。成長期真っ只中の12歳。

「目、覚めた？」

エリヤの顔を覗き込んだ少女の首元で、彼をあざ笑うように揺れるクロスが憎たらしくて、手の甲ではたいた。チャリッ　チエーンが涼しく鳴った。

「寝るから毛布返せ」

目をつぶり再び丸める体。だが少女は、せつかくたたんだ毛布を無造作に後ろへ放るや否や、

「素直じゃない子にはお仕置きを」

いつの間持っていたのか、右手に持った蛍光マーカの蓋をキユポンツと取る。エリヤが危機感から飛び起きるよりも早く

「　とうっ」

眉間にマーカーが走った。

クソチビがっ。

無音の悪態をつきながら顔を洗う。シンクを叩くほど勢い良く出した水を両手で掬い、打ち付けるようにして顔に当てる。殊、眉間は入念に。

ひとしきり洗い終えて蛇口をひねって　キュッ　唇を伝う雫を吹いて飛ばす。

「はい」

脇から差し出されたタオルを受け取ったエリヤは、拭った顔を腰から持ち上げた。シンクの上　壁に貼り付けられた鏡に、安眠を妨げられ不機嫌な男の顔が映った。青みがかった黒髪はこれ以上とない天然パーマ、同色の瞳は一重かつ切れ長で、右目が深緑。鋭角的な顎先に吹き出物を見付けて眉根を寄せた。眉間の蛍光マーカーは……まだ、うっすらと両眉をつなげていた。

「すつきりした？」

エリヤの左脇　洗面所と廊下をつなぐドアは外に開け放たれ、ドア枠に寄りかかっている少女に、返事代わりのタオルを投げ付ける。少女の左手がすばやくつかみ取った。

「これが起こしてくれた女に対するお礼？」

「問答無用にマーカーしといて何を言う」

「女を大事にする心って大切よ」

「12の女にくれてやれるほど、余ってねーの」

スウェット姿から、ジーンズと厚手のロングスリーブシャツに着替えた身を伸ばす。ハイカットのスニーカーに視線を落とし、靴紐を結ぶために身を屈めた。

「ところで、エリヤくん」

目だけ上げると、顎を突き上げて見下ろす少女が鼻を鳴らした。

「家賃がまだ払われてないんだけども？」

エリヤはすぐに目を逸らした。

「あー……払う気がないわけじゃ」

「この半年間、同じ口振りよ。食費含む生活費込みで月3万よ？
まともに働いてれば安い家賃じゃない。ルコモルコよ。こんなヘタ
レをずっと居座らせ続けるなんて」

への字に曲げた少女の唇と嘆息。

「さっさと追い出しちゃえばいいのに」

徹頭徹尾、嫌味を述べた少女にぐうの音も出ない。よしんば出たとしても、即座にまた嫌味を突き付けられるのが関の山。下手な言

動は起爆に至る。

「早いと朝食摂って、まともな仕事探しなよ」

少女はそう言うと、手元で弄んでいたタオルを放り上げた。洗面台と向かい合った、洗濯機に載せられた籠に、きれいに収まる。

「んじゃ」

くるりと身を翻した彼女は、頭の横でひらひらと手の平を振ってその場を後にした。今日は思いの外、嫌味が少なく済んだ事に何より胸を撫で下ろして、靴紐をきつく結ぶ。

洗面所から廊下に出ると、右手は突き当たりの行き止まり。左手に、よく磨かれた木の床が伸びる。壁に左右対称に並ぶドアは合計6枚。向かって右側 南向きのドアは、エリヤを含めた住人の部屋に割り当てられており、左側 すなわち北向きのドアは、手前から洗面所、浴室、書斎となっている。廊下を進んだ先には階段が下へと続き、コの字に折り返して1階へつながっていた。

「 あら、おはよう」

2階の廊下もそうなのだが、1階はよりコーヒーの香りにあふれる。おっとりした女性に迎えられ、あくびをかました後、

「おはよう」

隙あらば閉じようとするまぶたを眉ごと持ち上げて応えた。

階段を下り終えた彼は、ふと目に付いた、左手のドアにぶら下がる『REST ROOM』のプレートの傾きを直してやり、開けた空間を見やった。光をより多く差し込ませるため、左手の壁に並ぶ窓は大きめに作られ、テーブルとイスが余裕を持ってレイアウトされている。右手はカウンターが据え付けられていて、丸イスが整然と並ぶ。ご覧の通り、1階は喫茶店『Anny』の営業スペースである。

もう一度、エリヤはフロア全体に視線を配した。

「あれ？ ステフはどこ行った？」

来客は三人。窓際の席に座っているのは、タバコ片手に新聞を読むスーツ姿の初老の男性と、ノートパソコンをしきりにブラインド

タッチしているのは、学生らしい、チノパンにパーカー姿の青年、見るからにそれと感じさせる、ボリウムある長髪を掻き上げ気だるさを伴いタバコをふかす、ミニスカートとVネックセーターのお水お姉さん。広い窓から差す斜陽に照らされ、2人の紫煙が靄となり揺れる視界に、先程の少女　ステファニー「モロゾコフの姿がない。

「買い物に行ってもらってるの。いつものパン屋よ」

カウンターの中に設えたキッチンから女声の主は、カウンターテーブルにエリヤの朝食を出して、やわらかい笑みを湛えた。いつもの席　カウンター席の階段側から2番めのイスに腰掛けたエリヤは、早速トーストに噛り付く。外はカリッ、中はフワッとした食感とバターの甘い香りが口いっぱい広がる。

カウンター越しに、食器を洗う女を何とはなしに眺めた。栗色のストレートヘアを肩まで伸ばし、頬まである前髪は、額のやや右寄りのところで分けている。ポロシャツとチノパンにエプロンをかけた体軀は細く華奢だが、テキパキと洗い物を片付ける姿は凛々しく映った。通った鼻梁に細い唇、細めの二重まぶた、整えられた眉

『Anny』に来る男性客の中で、店の主人であるルコ「マイルイ目当てに来る輩の気持ちかわからないでもない。いかんせん、美人に部類する人物である。彼らがルコに関する決定的な事実を知ったら、はてさて、来客数はどう変動するのだろうか。

カラランツ

カウベルの澄んだ音色に、そんな事を考えていたエリヤは首を左にひねった。

「いらっしやいませ」

持ち前の魅力を存分に活かした営業スマイルを向けるルコ。開かれたドアから差し込んだ陽光が木張りの床に人影を映し出す。長身瘦軀をチエックのスーツで包んだ男は、ルコと目が合うなりにっこり笑顔を浮かべた。きれいに磨かれた革靴を踏み出し、カツカツと音を立ててカウンターに歩み寄る。

「あなたが、ステファニー・モロゾコフさん？」

やや低めの声と微笑。スクランブルエッグにフォークを差しながら、エリヤは苦虫を噛み潰した。この男は彼が苦手とするタイプだと、本能的に悟った。

「いえ」

営業スマイルを崩す事なく、濡れた手をタオルで拭きながらルコは首を振る。

「彼女は外出中です。何か言伝があるのでしたら、私から伝えておきますが」

エリヤは手近にあったケチャップを手にとった。スクランブルエッグの上で逆さまにした容器を押し潰す。

ブピッ。

下品な音と一緒にケチャップが散る。皿の上の黄色にまばらな赤。エリヤの左眉が跳ねた。ふと視線を感じて目をやると、男が露骨に嫌な顔をしてエリヤを見ていた。

「何か、メッセージは？」

ルコの言葉で男は微笑を取り戻す。

「自分で直接伝えたいのです。お願いがありましたら、顎を突き出したエリヤは、ケチャップで文字を書いた。なかなかの出来映え。ふんつ、と鼻を鳴らし、文字ごとスクランブルエッグを掻き回した。『Get Away』の文字はすぐに卵と混ざり込む。

「お願い、ですか？」

「はい。頼み事を」

「そうですね」

さりげなくルコの視線がエリヤに振り向いて、また男に戻った。「でしたら、10時半頃にまたいらしてくださいな。その時には、もう彼女もいると思いますから」

02:「あなたの熱意、しかと受け取りましたっ」

喫茶店『Anny』の営業は、午前7時から午前10時までの3時間で一旦閉めている。次の開店時間は正午の12時。それまでの2時間は、店長であるルコの早めの昼食と、昼食メニューの仕込みに費やされていた。1日通してもそれほど客数に至らないとは言えども、だからと言って手を抜いた料理を出すわけにはいかないルコの口癖であり、エリヤが数少なく尊敬している部分でもあった。

カチツ キッチンの壁に掛けられた皿で時を刻む針が、10時半を指す。客席の掃除を終えたエリヤは、カウンターの席でシーフードパスタを口に運んだ。ここは海に面した街、魚介類は新鮮で味もいい。加えて、ルコの料理の腕は拍手に喝采を足して尚、さらに賛美に値する。あつという間に、エリヤの皿は貝殻だけになった。「おいしかったよ」「ありがとう」

朝からずっと煮込んでいるスープの鍋が蒸気を噴く。彼の言葉に微笑で応えたルコは、最後の皿を拭き上げ、食器棚に丁寧にしまった。空になったエリヤの皿のとなりに淹れたてのコーヒーを置く。彼が食事を終える時間を見計らって用意してくれるコーヒーは、ルコのサービスピ精神を如実に物語っている。たゆたう湯気に息を吹きかけてひと口すすり、エリヤは客席を振り返った。

「人探しですね」
ブラインドの間から陽光を浴びる窓際 2人掛けのテーブルで、ステファニーは先程の男と向かい合っていた。

「そういう事」
男はステファニーに対して横に足を組み、主流煙と一緒に首肯した。

「とびつきりの美人なんだ。俺は一度しか会った事がないが、一目

で恋に落ちた」

右指に挟んだタバコから昇る煙を追う目を、彼はうつとりとさせる。

「その人の名前は、わかります？」

ステファニーが必死に苛立ちを抑えているのがわかった。

「ジントニツクの女、としか。名前と素性を知っているのなら、そもそも頼みになんて来ないさ。自分で探すよ」

10時半より10分ほど早く『Anny』を訪れた男は、ステファニーと顔合わせをするや、丁寧な物腰を180度変えてみせた。その目いわく、こんなガキが頼りになるのか？

「ここに来るまでに三人の探偵を雇ったんだけどさ、どいつもこいつもまったくダメ。役立たず。いっばしに看板掲げてるくせにたった一人の女も探し出せないと来たもんだ。結果も出せないってのに、よくもまあ探偵が務まるよ」

「名前も素性もわからないのでは、探す方も苦労すると思いますがステファニーが一応の弁解を試みる。灰皿に灰を落とした男の手が止まり、口が呆けたように開く。

「……………」

「……………」

「……………」お嬢ちゃん。探偵つてのは、探すのが仕事なんだよ。人を探せない探偵なんて聞いた事あるかい？ 網を持たない漁師と同じだ、何の役にも立たない。僕はね、お嬢ちゃん、役に立たない人間が一番嫌いなんだ。そんな輩がのうのうと生きていられる世界も信じられない。世の中には無能な人間が多すぎる。わかるかな、お嬢ちゃん？」

3回目、つと。

子ども扱いされるのがピーマンより嫌いなステファニーに対する禁句を胸中で数えたエリヤは、我関せずの体でルコを見た。煮込み中のスープの味見をしていたルコは、満足そうに頷く。

「今日のスープはご機嫌ね」

ステファニーたちの会話なんて、まったく耳に入っていない様子。「でしたら、あなた自身が探した方が早いんじゃないでしょーか」
お、よく耐えた。

テーブルの下から見える拳は堅く握られ、話す左頬は引き攣り、敬語が崩れ始めてはいるものの、ステファニーには拍手を贈りたい短気な彼女にとって、こういった類の男は耐え難いはずなのだから。
ふんっ 彼女の堪忍袋の尾が短い事など知らない男は、一笑に付した。

「有能な人間に時間がないのは世界のシステムだよ。だからこそ自分の下に人を付ける。人を動かす事でやっとな時間を効率化してるんだ。僕にはやるべき事が多すぎて、割ける時間がない。もしも万が一、僕が暇を持て余すような人間であつたのなら、喜んで時間を割こうじゃないか。だが僕はそんな事が許されるような立場にはいないし、嘆かわしいかな、3人の自称探偵どもは役に立たない。あきらめようにもあきらめられない時に、風の噂で『何でも屋』の話を目にしたわけだ。藁にもすがる思いでここに来た僕の心情を察してくれないかい」

両腕と紫煙を振り回し熱弁する男は、自分を悲劇のヒーローか何かに見えているようだ。ここまで常軌を逸している人間も珍しくて、エリヤは開けた口を塞ぐのも忘れた。

「……………はあ」

もはやステファニーの顔から表情は抜け落ちていた。タバコを灰皿に押し付けた男は、彼女の鼻先で 文字通り鼻先だったため、わずかにステファニーは顔を引いた ぱつと、指を開く。

「成功報酬は500万だ。必要経費は別途で出そう」

エリヤは危うく、口に近付けていたコーヒーカップを落としそうになった。

「っ、500万っ!？」

見ればステファニーの瞳が大きく見開いている。

「ジントニツクの女を見付けるのに、3人の自称探偵たちは役に立

たなかった。たった1人の女も見付けられない、そんな役立たずにはビター文払わない。しかし女を見付けられたのならば 結果を出せたのならば、相応の報酬を出すのがビジネスだ。ジントニツクの女は、僕にとってそれだけの価値があるって事さ」

「あなたの熱意、しかと受け取りましたっ」

男の手を両手で握ったステファニーの顔は、信じられないくらい輝いていた。と言うより、頬が緩みまくっていた。声も上ずっていない。

「ジントニツクの女、見付けて差し上げます」

「わかってもらえて嬉しいね、お嬢ちゃん」

高額の報酬の前では禁句も気にならない。

「それでは、早速契約しましょう」

テーブルの上に置いてあった紙を、男の前に滑らせる。

「ここに報酬額を記入していただいて、あつと、別途必要経費と書いといてください。それで、ここにはサインを」

男が言われた通りにペンを走らせるその文字を、食い入って見つめるステファニー。荒い鼻息が聞こえてきそうさだ。

「これでいいかい？」

記入し終えた契約書をまじまじと見つめ、彼女は飛びつきりの笑顔を浮かべた。

「はいっ！」

「それじゃ、後は頼むよ。これからミーティングがあるもんでね」
席を立った男が差し伸べた手を、ステファニーは弾かれたように立ち上がり、強く握った。

「ところで」

ドアへ歩を進めようとした男を、彼女が呼び止める。

「ジントニツクの女とは一度だけお会いしたとおっしゃってましたが、それはどちらで？」

振り返った男は前髪を掻き上げ、爽やかに笑ってみせた。

「Lovers Barだよ」

Smokin'with JAZZ

カウベルが、男の退出に鳴った。

03:「ジンライムじゃなくて、ジントニックの女」

「Lovers Barってのは、最近始まったサービスなのよ。ネット上で作られたバーで、社交界の場として、利用者は増え続けてるみたい。利用者は、主に資産家ね。その理由はまったくもって明快で、会費が高いってのがそれ。資産家たちはバーにアクセスして、同じようにアクセスしている他の利用者と会話ができる。国籍も違えば言語も違う人と、物理的な距離の隔たりを一切無視して話せるんだもの、コネ作りには最適よね。このバーが作られた理由は、そんなコネ作りもあるんだけどさ、メインは違うのよ。自分に合った異性探し。許嫁とか政略結婚とか、そんな苔むした親の思惑に忠実にいられるほど、今時の金持ち青年男女は物分りが良くない。自分の相手くらい自分で探すってのは、私も同感ね。親の都合で決められる結婚生活なんて反吐が出そうよ。けど、親からしてみれば、どこの馬の骨とも判然としない異性との結婚なんて許したくない。自分の血筋ってもんがあるからなんだろうけど、はんっ、それがどうだったのよ。何にしろ、自分たちと同等か、それ以上の資産家の血筋が欲しいものなのよ。私にはわからない気持ちだけどね。わかる？ わからないわよね、金持ちの考えなんて。親には結婚相手を決められたくない、息子・娘には確実な血筋の相手を持つて欲しい。そんな両者のニーズにすつきり応えようってんで作られたのが、Lovers Barってわけよ。会員になるにはIDも必要になるし、血統書付きの人間と直に話して自分の意志で相手を決められる。みんながみんな、笑ってハッピーなシステムの」

投げやりに嘆息を交えて、ステファニーは説明を終えた。

「出会い系か」

聞いた感想 ステファニーの私情が盛りだくさんな早口を説明と呼んでいいものが逡巡した後 ぱつと頭に浮かんだ一番の感想

をエリヤが呟くと、彼女は肩をすくめて、

「平たく言えばね」

必要以上につまらなさそうに、紅茶の入ったマグカップに口を付けた。アッフルティーの仄かな香りがエリヤの鼻の下をよぎる。

2人は今、ステファニーの部屋にいた。エリヤの部屋よりもやや広めの部屋には、クローゼットと小さなテーブルと液晶テレビ、ステファニーが腰掛けているベッド、そしてエリヤが座っている回転イスの前にはパソコンラック。12才の女の子が生活している空間にしては、やや可愛らしさに欠ける。地球外の生物としか思えない、緑色の何かのぬいぐるみがステファニーの横に転がり、出窓には、親指だけ離れた手袋の形のもと、両腕を上げて万歳しているようなサボテンが2つ、昼下がりの日光浴と洒落込んでいた。

水曜日、昼下がり。『Anny』は今日もそこその繁盛で、階下のホールではルコとアルバイトの女子大生（製菓専門大学）が忙しく動き回っている。いくらそれほど忙しくない店とは言えども、それほど暇でもない。なのに店員2人で営業するというのだから、ルコモアルバイトも目を見張る腕前に違いない。実際、2人の働きっぷりを見た事のあるエリヤは、目と口をあんぐり開け、くわえていたタバコを膝に落とした経験を持っている。

「んじゃ、行つてらっしゃい」

「待て」

ステファニーの言葉が脈略ないように聞こえたのは、決してエリヤの思考のせいではなく。

「待て待て待て」

まさかストップをかけられるとは予想だにしていなかったようで、ステファニーはキョトンとした。

「何？」

「Lover's Barが会員制のセレブな出会い系って事はわかった。よくわかった。そいでもって、そこに行くためにこいつが必要つてのもわかった」

エリヤは手元にあるそいつ 目元を完全に覆ってくれるであろうヘッドギアを持ち上げてみせた。見た目よりもずっと軽いそいつは、耳元から端子のチューブを伸ばし、目の前のパソコンと接続されている。今朝方、男の遣いが持ってきた物だ。

「んで、Lover's Barに入場するためには、このサイトでいいんだろ？」

パソコンの液晶画面には、黒地で白抜きの『Lover's Bar』の文字。その下に、IDとパスワードの入力欄。

「そうよ」

手応えのない返事に、エリヤはため息しか吐けなかった。

「……………で〜〜〜、誰のパスで入るんだ？」

「ケリー＝コストマン」

「……………で〜〜〜、誰として、入るんだ？」

「ケリー＝コストマン」

ことごとくすぱつと答えてくれるステファニー。皮肉めいた視線を送ってやると、すかさず睨まれた。

ケリー＝コストマン 昨日のいけ好かない野郎の名前である。

「俺、エリヤ＝マルソーってんだけど」

「Lover's Barの入会費と会費、知りたい？」

「遠慮しときます」

よろしい、と深く首肯したステファニーは次いで付け加えた。

「くれぐれも、依頼人の信用を木っ端微塵にするようなへマはしないように。わかってるとは思うけど、入れ替えだなんてバレたら即退会だし、依頼そのものもなくなるし、報酬も入らないんだからね」

釘を刺すと表現するより、全力で滅多打ちにする口調。

「報酬が入らないって事は、エリヤの家賃も払えないって事だね」

さらに刺々しい言葉。

「それは痛い」

「だったら四の五の言わずに行つて来い」

これが年上の相手に対するセリフなもんだから、この12才は怖

い。

「……一つ、いいか？」

ずっと疑問に思っているところがあった。背を預けたイスの背もたれが軋む。

「Lover's Barって、つまるところは出会い系だろ？」

「もしもジンライムの女が」

「ジントニック」

「ん？」

「ジンライムじゃなくて、ジントニックの女」

どっちだつていいじゃねえか 背中ごと首も一緒に反ってステファニーを見る。逆さまに見る彼女は、やはりつまらなさそうに、マグカップに口を付けていた。

「その、ジントニックの女？ が、今もいるとは限らないんじゃないか？ すでに相手を見付けてよ、したらもうLover's

Barは用無しだ。いない可能性だってある」

「その時はその時。人目で恋に落ちたって言っても、もう相手がいると知れば」

バカみたいに口を半開きにしたまま、ステファニーの視線が宙を漂う。

「……ま、私たちの仕事は人探しだから」

ケリーの性格に対する言及は避けて、さっくり思考を切り替えた。彼女が避けた先を、エリヤはあえて踏み出してみる。

「あの性格だと、相手が見つかったようなんでもうLover's Barにはいなかったんで見付けられませんでした、ってわけにもいかなそうだけどな」

「見付ければいいのよ。何も、口説けなんて依頼じゃないんだから。もし、もう相手がいるようならば、その次にどんな行動を起こそうかあの男の勝手よ」

「所詮、俺らは仕事するだけの人形だからな」

これはステファニーの口癖のようなもの。若干12才にして、な

んともらしくない語句を身に付けてしまったものである。

「わかつてるじゃない」

語尾まで聞く事なく、エリヤは体を正位置に伸ばした。キーボードに置いた手が、つい先程記憶したばかりのIDとパスワードを打ち込む。ウィンドウが切り替わり、しかし黒地はそのままに、白抜き文字がヘッドギアの装着を促していた。

「行つてらっしゃい」

呑気に手を振るステファニーなどまったく無視して、エリヤはヘッドギアを装着した。視界に赤い点が 豆電球ほどの大きさで灯った点が チカチカと明滅。ヘッドギアの暗闇に浮かぶ唯一の光源を見つめるうちに、エリヤの体が、脳が、めまいに近い浮遊感に包まれ

D
I
V
E

04：「ジントニツクの女　その名前を聞きたいだろ？」

目を開くとそこは、まさにバーだった。特有の光の暗さが閉じ込められた空間。どこからともなく、謙虚なまでに控えめに流れるジャズ。地面はガラススタイルで、淡く青白い光を発している。眼前にあるのは長方形に区切られたスペース。左手にはバーカウンタ―と女バーテンダー。右手にはスタンディングテーブルが等間隔を保って突き当たりの壁まで並んでいる。

「いらつしゃいませ、ミスター・ケリー＝コストマン」

シヨートヘアで小顔が蝶ネクタイに良く似合う女バーテンダーが、綺麗な金髪を揺らしながら笑顔で応対してくれた。その名で呼ばれるのがいささかならず気に食わないエリヤだが、その名を借り、こうしてLover's Barにいるのだから致し方ない。自身を見下ろすと、チエツクのスーツを身に付けているのに気付く。今のエリヤは、おそらく誰の目から見てもケリー＝コストマンに他ならない。鏡がないのが救いだった。

「ケリーじゃないか」

バーカウンターの奥側の隅で、男が手を振っていた。

「この時間にいるなんて珍しいな。毎週水曜日はミーティングだったんじゃないのか？」

「へー、そうだったのか。」

そんな話、まったく聞いていなかった。身代わりとして行動させるのなら、それ相応の情報を提示して欲しいものだ。

「ん、まあね。今日は例外なんだ」

ケリーの声で答えて、背筋が凍るほどの悪寒が走る。

「経営者は大変だな。親のグループ会社の1つを任せてもらってんだろ？」

「だから、聞いてない。」

次に会った時に何て言っただろうか思案しながら、曖昧に頷いて

おいた。

年齢は幾つくらいなのだろう？ エリヤは、男の容姿を不自然に思われない程度に窺った。髪は茶、スーツは焦げ茶、身長はエリヤと同じくらいだろうか。否。今のエリヤの視点はケリー。コストマンなのだから、ケリーと同じくらいと言うのが正しい。猫のよな目をした男だった。

「それよりだ、ケリー」

猫目の口調が一転、真剣なものに変わる。となりのイスを叩き、座れと促す彼に従って、エリヤは歩み寄った。自分がケリーの偽者である以上、知り合いとの接触は極力回避したいところだが、露骨に拒否しても不審がられるだけだ。

座ろうとして 急に腕をつかまれる。

「ケリーの探してる女の事だな」

内心焦ったエリヤは、それを聞いて安心した。バレたわけではないらしい。唇の端を吊り上げると、妙に悪人面に見える男だった。

「知ってるのか？」

口走ってしまってから、軽率だと後悔した。

「俺は知らねえよ。前にも言ったじゃないか。昨日、ジントニツクの女の事を調べとけて俺に行つたのはどこのどいつだ？ そんな忘れっぽいヤツでもないだろ」

「ああ、そうだった」

ケリーの事だ、人を使って当たり前だった。何も、エリヤたちだけに人探しを頼むばかりでなく、情報集めに人を動かしていても当然である。よもや、Lovers Barの中にいるとは予想していなかったのだが。

それにしても。

人間関係ぐらい教えとけよ。

もしもエリヤだと、入れ替わっているとバレてもケリーの不注意だ 早々に責任転嫁した。

「で？ 何かわかったのか？」

問うと、猫目はエリヤの胸元に人差し指を突き付けた。

「あの女、滅多にLover's Barに來ないんだな。ほとんど週末にしか來ないケリーが會わなくなつて不思議じゃない。あの女は、週初めにしか來ないんだ」

彼は試すような目で見上げて來る。ケリーであるエリヤに、一体何を求めているのだろう。唇を吊り上げたまま先を続けようとする猫目に息苦しさすら覺えた。

腕を放そうとしない猫目の手を剥がして、エリヤはイスに腰掛けた。

「今日はクールと言うより、無愛想だな」

「部下がつまらない失敗をしたんだよ」

ごく自然に言葉が出た。しかしそれが功を奏したらしく、彼はなるほど神妙に頷いただけで訝るには至らなかつた。横目で様子を窺っていたエリヤは、悟られないように安堵の息をついた。

「おかしいと思わないか？」

おもむろに尋ねられ、内心戸惑う。

何が？ どこが？

「週初めより、週末の方がこの利用者は多い。会社経営だ何だと忙しいヤツらが多いからな。利用者が多い方が、より多くの男と話ができる。出会いやすいはずだ。にもかかわらず、ジントニックの女は、人の集まりの少ない週初めにしか現れない」

たしかに、それはおかしい。利用者の多い時間帯・日にちを選んだ方が相手を見付けやすくなるはずなのに。

奥から女の笑い声が聞こえて、猫目の顔が険しくなつた。その肩越しに奥を覗こうとエリヤは背を伸ばしたのだが、突き当りから左側に広がるスペースの奥など、物理的に見えようはずがない。

「あの女はやめとけ、ケリー」

猫目の瞳は輕蔑を孕んで、エリヤを見上げた。

「いつでもああやって男をはべらせて、参っちまつた男を片っ端から切つてく女だ。いくらケリーでも、あの女は荷が重過ぎる」

頭上で手を振って吐き棄てる。エリヤは大人しく居住まいを正す事にした。女の笑い声しか聞こえなかったのだが、注意して聞いてみれば男の声の方が多い。

「ケリー」

いつの間にか猫目の表情から侮蔑は雲散し、意味深な笑みを口元に浮かべていた。

「ジントニツクの女　その名前を聞きたいだろ？」

「わかったのか？」

名前さえわかればこっちのものだ。素性を探る事がぐんと容易になる。偽名の可能性が頭をよぎるが、Lover's Barのシテム上IDチェックがあるのだから、そこは信用しても良いと判断した。

猫目の唇が動く。何の躊躇なく。

「　カルラ＝クリステイ　」

体が硬直するのを実感した。間接がジョークみたいに硬化する。

動かした途端に折れそうだ。心臓の音が爆音に聞こえる。気管が苦しい。カルラ＝クリステイ。胸中で呟いた音吐。首筋がぞわぞわする。何だこれ。眩暈感。脳はしかし冴えていた。真夏の夜の夢。オルゴールの音が好きなのだって涼しげじゃないそれでいて寂しげでだけどんな音楽よりも胸に届くのよそう思ったりしないのあなたって寂しい人でもそれを自覚してないみたいあなたその右目は何を見てるのたまにはオルゴールに耳を傾けてみてよタバコなんて似合わないよ

エリヤ。

「　ケリー？」

猫目が目の前で手を振っていた。心配よりも胡乱を帯びている目と目が合った。

「どうした？」

「ありがとう。おかげでいい情報が手に入ったよ」

彼の視線から逃れるように、エリヤは席を立つ。

「もう帰っちゃうのか？」

大仰に腕を降り広げながら彼は抗議したが、そんなの知った事ではなかった。

「お帰りですか？」

今までずっとグラスを磨いていた女バーテンダーが、業務的な動きで顔を上げる。

「また来るよ」

彼女と彼に手を上げて、エリヤは努めて笑んだ。

「お待ちしています」

バーテンダーは微笑んで、猫目は呆れて

俺って、女の微笑みに弱いんだよな。

とうにわかり切っている事を思った。

05：「懺悔してまで救われようだなんて思ってねえの」

目を開くとそこは、まさにバーだった。特有の光の暗さが閉じ込められた空間。どこからともなく、謙虚なまでに控えめに流れるジャズ。地面はガラススタイルで、淡く青白い光を発している。眼前にあるのは長方形に区切られたスペース。左手にはバーカウンタ―と女バーテンダー。右手にはスタンディングテーブルが等間隔を保って突き当たりの壁まで並んでいる。

「いらつしやいませ、ミスター・ケリー」コストマン」

シヨートヘアで小顔が蝶ネクタイに良く似合う女バーテンダーが、綺麗な金髪を揺らしながら笑顔で応対してくれた。その名で呼ばれるのがいささかならず気に食わないエリヤだが、その名を借り、こうしてLovers Barにいるのだから致し方ない。自身を見下ろすと、チェックのスーツを身に付けているのに気付く。今のエリヤは、おそらく誰の目から見てもケリー」コストマンに他ならない。鏡がないのが救いだった。

「ケリーじゃないか」

バーカウンターの奥側の隅で、男が手を振っていた。

「この時間にいるなんて珍しいな。毎週水曜日はミーティングだったんじゃないのか？」

へー、そうだったのか。

そんな話、まったく聞いていなかった。身代わりとして行動させるのなら、それ相応の情報を提示して欲しいものだ。

「ん、まあね。今日は例外なんだ」

ケリーの声で答えて、背筋が凍るほどの悪寒が走る。

「経営者は大変だな。親のグループ会社の1つを任せてもらってんだろ？」

だから、聞いてない。

次に会った時に何て言つてやるうか思案しながら、曖昧に頷いておいた。

年齢は幾つくらいなのだろう？ エリヤは、男の容姿を不自然に思われない程度に窺つた。髪は茶、スーツは焦げ茶、身長はエリヤと同じくらいだろうか 否。今のエリヤの視点はケリー「コストマンなのだから、ケリーと同じくらいと言うのが正しい。猫のような目をした男だった。

「それよりだ、ケリー」

猫目の口調が一転、真剣なものに変わる。となりのイスを叩き、座れと促す彼に従つて、エリヤは歩み寄つた。自分がケリーの偽者である以上、知り合いとの接触は極力回避したいところだが、露骨に拒否しても不審がられるだけだ。

座ろうとして 急に腕をつかまれる。

「ケリーの探してる女の事だがな」

内心焦つたエリヤは、それを聞いて安心した。バレたわけではないらしい。唇の端を吊り上げると、妙に悪人面に見える男だった。

「知ってるのか？」

口走つてしまつてから、軽率だと後悔した。

「俺は知らねえよ。前にも言つたじゃないか。昨日、ジントニツクの女の事を調べとけて俺に行つたのはどこのどいつだ？ そんな忘れっぽいヤツでもないだろ」

「ああ、そうだった」

ケリーの事だ、人を使って当たり前だった。何も、エリヤたちだけに人探しを頼むばかりでなく、情報集めに人を動かしていても当然である。よもや、Lovers Barの中にいるとは予想していなかったのだが。

それにしても。

人間関係ぐらい教えとけよ。

もしもエリヤだと、入れ替わっているとバレてもケリーの不注意だ 早々に責任転嫁した。

「で？ 何かわかったのか？」

問うと、猫目はエリヤの胸元に人差し指を突き付けた。

「あの女、滅多にLover's Barにこないんだな。ほとんど週末にしか来ないケリーが会わなくなつて不思議じゃない。あの女は、週初めにしか来ないんだ」

彼は試すような目で見上げて来る。ケリーであるエリヤに、一体何を求めているのだろう。唇を吊り上げたまま先を続けようとしている猫目に息苦しさすら覚えた。

腕を放そうとしない猫目の手を剥がして、エリヤはイスに腰掛けた。

「今日はクールと言うより、無愛想だな」

「部下がつまらない失敗をしたんだよ」

ごく自然に言葉が出た。しかしそれが功を奏したらしく、彼はなるほどと神妙に頷いただけで訝るには至らなかつた。横目で様子を窺っていたエリヤは、悟られないように安堵の息をついた。

「おかしੀと思わないか？」

おもむろに尋ねられ、内心戸惑う。

何が？ どこが？

「週初めより、週末の方がここの利用者は多い。会社経営だ何だと忙しいヤツらが多いからな。利用者が多い方が、より多くの男と話ができる。出会いやすいはずだ。にもかかわらず、ジントニックの女は、人の集まりの少ない週初めにしか現れない」

たしかに、それはおかしी。利用者の多い時間帯・日にちを選んだ方が相手を見付けやすくなるはずなのに。

奥から女の笑い声が聞こえて、猫目の顔が陰しくなつた。その肩越しに奥を覗こうとエリヤは背を伸ばしたのだが、突き当りから左側に広がるスペースの奥など、物理的に見えようはずがない。

「あの女はやめとけ、ケリー」

猫目の瞳は軽蔑を孕んで、エリヤを見上げた。

「いつでもああやって男をはべらせて、参っちまった男を片っ端か

ら切つてく女だ。いくらケリーでも、あの女は荷が重過ぎる」

頭上で手を振って吐き棄てる。エリヤは大人しく居住まいを正す事にした。女の笑い声しか聞こえなかつたのだが、注意して聞いてみれば男の声の方が多い。

「ケリー」

いつの間にか猫目の表情から侮蔑は雲散し、意味深な笑みを口元に浮かべていた。

「ジントニツクの女　その名前を聞きたいだろ？」

「わかつたのか？」

名前さえわかればこっちのものだ。素性を探る事がぐんと容易になる。偽名の可能性が頭をよぎるが、L o v e r ' s　B a r のシステム上IDチェックがあるのだから、そこは信用しても良いと判断した。

猫目の唇が動く。何の躊躇なく。

「　カルラックリスティ　」

体が硬直するのを実感した。間接がジョークみたいに硬化する。動かした途端に折れそうだ。心臓の音が爆音に聞こえる。気管が苦しい。カルラックリスティ。胸中で呟いた音吐。首筋がぞわぞわする。何だこれ。眩暈感。脳はしかし冴えていた。真夏の夜の夢。オルゴールの音が好きなのだって涼しげじゃないそれでいて寂しげでだけどどんな音楽よりも胸に届くのよそう思ったりしないのあなたって寂しい人でもそれを自覚してないみたいあなたその右目は何を見てるのたまにはオルゴールに耳を傾けてみてよタバコなんて似合わないよ

エリヤ。

「　ケリー？」

猫目が目の前で手を振っていた。心配よりも胡乱を帯びている目と目が合った。

「どつした？」

「ありがとう。おかげでいい情報が手に入ったよ」

彼の視線から逃れるように、エリヤは席を立つ。

「もう帰っちゃうのか？」

大仰に腕を降り広げながら彼は抗議したが、そんなの知った事ではなかった。

「お帰りですか？」

今までずっとグラスを磨いていた女バーテンダーが、業務的な動きで顔を上げる。

「また来るよ」

彼女と彼に手を上げて、エリヤは努めて笑んだ。

「お待ちしています」

バーテンダーは微笑んで、猫目は呆れて

俺って、女の微笑みに弱いんだよな。

とうにわかり切っている事を思った。

「ここには、私と貴方しかいません」

前後左右、手を伸ばしきる事なく壁に届いてしまうほどの狭い部屋は、自然と便所を彷彿とさせる。

「神父が不在のため、シスターである私が神に代わって聞かせていただきます」

足を組むと、木で組んだイスが軋んだ。

「名乗らなくていただかなくて結構です。お話だけ、聞かせてください」

見上げた天井は高く、十字架の形に壁にはめられた窓が陽光にきらめいた。

「悔い改めましょう」

「それ以上、その声で話すのはやめねえか、ハルネ？」

我慢できずに言い放つ。横目で、右手の壁に張られた小さな格子を見つめる。その向こうで、シスター服の裾が揺れた。

「たまには懺悔したらどうなのよ、エリヤ」

穏やかだった声音が一転、好戦的なそれに変わる。

「懺悔してまで救われようだなんて思ってたねえの」

「あら残念」

ちつともそうは思っていない口振り。続いて、ジッポを開く金属音。

「をい」

「何？」

「懺悔室をスモークで演出か？」

「かたつ苦しい事は言うなって。あんたも吸う？」

格子がスライドして開かれ、タバコの箱を差し出された。

なんてシスターだ。

「あ、やめたんだっけか」

呆れてものも言えないエリヤから、あっさりハルネは箱を引っ込めた。

「……先月、街に戻って来たんだってな。ステフから聞いた」

「ちよつと東洋の方にね。おチビちゃんは元気？」

「ステフはいつだって元気だよ。東洋？ またどうしてそんな所に？」

「恋人探し」

「ハルネの恋人になるには相当の覚悟が必要だしな。その上、本人は高望みしてると来てる。東洋にはいい男はいたか？」

「ウソよ」

「ああ、そうだろうと思ったよ」

必要以上に刺をもつて、エリヤは言い捨てた。

「あははは！」

爽快に笑うハルネの音量は大きく、狭い壁によく響く。

「うるせー」

小さく呟いて顔をしかめるが、彼女に見えるべくもない。たとえ見えたとしても、豪快な笑いを止めはしないのだろうが。

「あんまりからかい過ぎると本気でキレそうだから、こんくらいに

しどころか」

気が済むまで笑い終え、ハルネは息を吸った。

「東洋の土産話を聞きに来たわけじゃないんだろっ？」

「聞いたかねえよ」

格子から漏れる副流煙を手で仰ぎながら、

「ちよつとばかり人を探してるんだ。これがまたヤゝな依頼人でさ」

「あんたの愚痴って長くなるからカットして」

問答無用で切られた。出鼻をくじかれ、ため息。十字の斜陽に紫

煙が揺れる。

「カルラ〓クリステイって女を探して欲しいんだ」

「カルラ〓クリステイ？」

反芻するハルネに短く肯定した。

「あんたが探せばいいじゃない。わざわざ私に頼む事なんてないと思っけど」

表情を窺う事はできなくとも、彼女が怪訝そうにしているであろう事は声からでも十分に察せる。エリヤは1秒ほど迷ってから、本心を告げた。

「……俺が探してもいいんだけど、なんてーか、私情を挟んじまいそう」

「ああ、そのカルラ〓クリステイ」

「もしかしたら別人かも知れねえけど、もしかしたら、そのカルラ〓クリステイかもしれない」

「まだ吹っ切れてないの？」

「とつくに吹っ切れてる」

エリヤは失笑した。

「つもりだった」

「未練タラタラね」

「だよな。俺自身、驚いてるよ」

「もしも」

ハルネの声が一瞬だけ張りつめる。

「もしも、そのカルラ＝クリステイだった時は、エリヤはどうすんの？」

「……さあね」

「答えなんてもう見付けてるって風に聞こえるけど？」

「そりゃ気のせいだ」

右手で左拳を握り、骨を鳴らす。軽く、乾いた音が微動した。

「あっそ」

素っ気無い返事。ふてくされていているようにも感じられる。

「じゃ、それにしよう」

唐突に、しかしきわめて自然の成り行きのように、ハルネの口調は踊っていた。エリヤの胸に広がる嫌な予感。

「エリヤがどうするつもりなのか　その答えが今回の報酬」

「……まぢか」

「それとも、ちゃんと金払う？　知ってるだろうけど、私の仕事は高くつくぞー」

「まけて」

「まけない」

「ツケで」

「即金でよろしく」

ふふん　鼻を鳴らし、勝利を確信しているハルネの笑顔。実際に見えなくとも、想像には難くない。こいつはいつだってそうだ。爽やかに、軽やかに、時に艶やかに。他者とは孤立した立場でありながらも常に高みに立ち、周囲を睥睨する。

「どうすんの？」

そんなヤツ相手に自分から挑もうと思うほど、無鉄砲にはなれねえんだよ。

誰にともなく胸中で呟き、ため息ひとつ。

「……わかったよ」

エリヤは了承した。

06：「会う必要なんてないと思うよ」

石畳の道路とレンガ造りの家々が未だに残っているこの街を、エリヤは決して嫌悪したりはしていなかった。海に面して扇状に展開する港町は、いつだって時間が緩やかに流れ、人々の表情は豊かだ。都市にしているような切迫した仕事人間など、ほとんど見た事がない。街の至る場所で井戸端会議が行なわれ、路上電車の脇では子供たちがボールで遊ぶ。噴水広場には、自称デザイナーたちがアクセサリーを並べ、停車した軽トラックを出店代わりにホットドッグを売り、老夫婦が日向ぼっこに手を掲げ、犬が目を細める。

この街がいつから、シー・ドールシールと呼ばれているかなど知った事ではないが

エリヤは、この街が好きだ。

港を横切り、市場として出店が軒を並べる通りを歩く 何も魚介類だけでなく、野菜や肉、食物だけでなく、雑多な雑貨までも扱う、市場通り 毎週木曜日は、この通りは雑踏でいっぱいになる。週に一度の市場。パワフルな淑女方々が我先にと新鮮な食物を争い、出店の店員がトークを武器に商品を捌く。自然、通りは活気付き、一歩足を踏み入れてしまえば否応なしに人波にもまれる。うんざりしながらも、流れてしまっっては仕方ない、幸運にも漂流した八百屋で艶やかなリングゴを手についたエリヤは、不意に肩を叩かれた。

「ていつす」

24時間、常に眠たそうなタレ目は半眼。顎のラインに切りそえた金髪が潮風にそよいだ。身長はエリヤより少しだけ高め。襟元にファアの付いたコートは実に暖かそうなのだが、マフラーに鼻まで埋める彼はそれでも寒そうだった。

「背中、ガラ空き。そんなんじゃ、俺に殺されちゃうよー？」

キア「カティリヤはそう言う」と寒気に身震いした。

「殺気がねえよ」

手に取ったリングを戻す。エリヤは不機嫌っぽく眉をひそめて、キアの瘦躯をはたいた。

「だって、寒いじゃない」

「寒いと殺気が消えるのか」

「動きたくなくなるよ」

「変温動物か、お前は」

港を右手に見ながら、2人は人波に乗って突き進み たか

ったのだが、キアの言葉通り、彼の踏み出す足は呆れる以上に遅かった。彼の歩幅に合わせたエリヤはキアとそろって、何度も淑女の体当たりに揺れる事となった。

「キアがこの季節にルシールにいるなんて、ずいぶん珍しいんだな」

「この街、冬の寒さがキツいからね」。動きにくいつたら」

「じゃあ、どうしているんだよ?」

「エリヤの顔が見たくなって」

「何だそりゃ」

らしくない発言をエリヤは一笑に付したが、キアはポケットに手をつ突っ込んでマフラーには顔の半分を埋め、何ら反応を示さなかった。

「エリヤは」

青空を舞うカモメの白い点を見やりながら、キアは籠もった声を出す。

「エリヤは、今何してんの? ルコ姉の所で仕事請け負ってるって聞いたけど。何だっけ……サンバ屋?」

踊れと言うのか。

「……………何でも屋、だろ? てか何だ、サンバ屋って」

「そうそう、何でも屋だ。何でも屋。こんな平和な街なのに、エリヤの力が必要になる仕事なんて入んの?」

言われ、エリヤは苦笑する。

「キアは俺を買い被りすぎなんだよ。今は上流階級の方のために人

探し中。これがまた嫌なヤツなんだよ。どうして社会的地位を持った人間ってのは」

「それ、長い？」

キアがすかさず割り込んだ。

「いや」

「仕事内容だけ話して欲しいなー」

「長くないつつつてんだろ」

「エリヤの愚痴が長くないだなんて、信じられるわけないじゃない。さらりと直球。自然と、ハルネとのやり取りが思い出される。」

「……そんなに、俺の愚痴って」

「呆れるくらいに長いよ」

2投目。

それ以上の言及は早々に諦める事にして、エリヤは Lover's Bar の事を話した。本来なら依頼に関する話なんてものは他言無用なのだが、キアは信頼のおける人間である。口止めるまでもなく、その口は堅い。世間話などと決して呼べない話題ではあるが、気兼ねなく話せる相手がいるというのは、ずいぶんと気が楽になる。周囲の人波なんて、ここでエリヤが何を言ったところで、聞いてなんかいないものだ。

「ふうん」

相槌も打たず始終ぼおつとしていたキアは、話を聞き終えるとその鼻をヒクつかせた。さながら小動物のような動作である。

「カルラ」クリステイ 懐かしい名前だね」

2人が並ぶ道はやがて市場通りを抜け、レンガ造りの景観 商店街へとつながる石段を上る。呟いた彼の瞳を盗み見てみたが、それは懐古にふけっているわけではなく、科白は単に言ってみただけの台詞だったらしい。

「んーで」

キアの寝ぼけ眼がエリヤを見据える。

「エリヤはまだ、全景が見えてないんだ？」

恐れ入ったため息を、エリヤは首を振りつつ漏らした。

「見えて来るもんか。まだその女とは会ってもいないんだから」
「会う必要なんてないと思うよ」

市場通りと同様に、こちらもまた活気付いている商店街の喧騒。危つくキアの声は消えそうになる。買物客を一人でも多く獲得しようとする店番と、それぞれのペースで歩く老若男女。市場通りよりも殺気付いてはいないのだが、やはり商店街。人、人、人、声、声、声。

ふと、自分たちはここに不似合いだと エリヤは感じた。

「会って、話してみなきゃわからんだろ」

あまりにも自信を持って否定され、エリヤの眉間にわずかながらシワが寄る。

「エリヤは知らないだけ。同姓同名の人間なんて、そうそういないもんだよ。いたとしても、それは同世代じゃない」

断言するキアの語調が引つかかった。

「Lover's Barのカルラクリステイが、カルラ本人だつて物言いだな」

「んー」

肯定もしなければ否定もせず、曖昧に肩をすくめて、
「彼女が今、どこで何してるか知ってる？」

突然何を言い出すのかとキョトンとしながらも、エリヤは首を振った。

「いや、知らない」

「あそつか。だからハルネにお願いしたんだもんねー」

エリヤが続けようとした言葉を先に取りられた。

「だったら、すぐにわかるよ。ハルネの仕事って、いつだって確実に早いし。敵に回したら厄介な相手だよ」

同感。

「そういや、キアはハルネとやり合った事があるんだっけか」
「一度だけ」

「どうだったよ?」

「勝ち目なんかなかったよ。思い切り殺^とるつもりで飛び込んだのに、前髪しか切れなかったんだから」

「キアは?」

「肋骨3本と左腕を折られた。割に合わない仕事だったな。それ以来、ハルネに係る仕事は断わってるくらいだよ」

「何にせよ、とキアは足を止めた。つられてエリヤも歩を止める。

「カルラの件はすぐにわかるよ。報酬、たんまりもらえるといいね」

「じゃ エリヤが言葉を発する間もなく、寝ぼけ眼の殺し屋は雑踏に紛れた。」

07:「合格だ」

Lover's Barには、水曜日に会った男しかいなかった。
「やあ、ケリー。早速、週初めに來るつたあ、あの女にそれだけご
執心つてわけだ」

カウンターの隅の席でグラスを持ち上げる彼を見、ふと思う。

こいつ、何者なんだ？

ここに集う人間は、主に資産家であるとステファニーは言っていた。男であれば青年実業家であるし、女であれば箱入り娘。月曜日の夕方であると言うのに、この男はここにいる。

「カルラ」クリステイは、まだいないんだな」

男のとなりに座る。すぐに会えるかもしれないと予想していただけに、肩透かしを受けた気分だった。もし、エリヤの知っているカルラだったら 期待に似た緊張は、とうに消えている。

「そう急ぐなつて。酒でも飲みながら、気楽に待とうじゃないか。
バーチャルだから味も酔いもないが、バーでグラスを傾けないつてのは、野暮つてもんだ」
「そうだな」

男はカルラ「クリステイの來訪を確信している口振りだった。彼が信頼に足る人間がどうか知れないが、唯一の手がかりに変わりはない。

どうしても カルラ「クリステイに会わなくてはならない。

「何をお飲みになれますか？」

女バーテンダーが愛想良く微笑。味も酔いもない酒なんてないも同じなのだし、何でも良かったのだが。黙考して、エリヤは決めた。
「ジントニックを」

パチッ。

不意を突いて男が指を鳴らした。

「……何だよ、いきなり」

「すげーな。知ってたのか？」

何を言っているのかさっぱりわからない。キョトンとする。

「じゃ、単なる偶然か？ それにしちゃラッキーだよ、ケリー」

にやけた男はそう言つと、エリヤの前に出されたグラスに自分のグラスを合わせた。

チンツ。

「合格だ」

グラスから人差し指だけが離れて、エリヤの背後を指す。

何だつてんだ。

何気もなく振り向いたエリヤの瞳が、これ以上となく開いた。

暗く、ランタンのような橙色の光をぼんやり反射する髪は青みを帯びた黒。すつと通った鼻筋を二重の双眸が飾り、顎は滑らかに細く、知性的な何かを感じさせる。明るすぎない青のドレスが、その華奢な体をタイトに包んで、グラスを傾ける様はさながら写真のようだった。

「……カルラ」

呆然と零れるエリヤの言。記憶のままに、彼女はそこにいた。

「こんばんは」

微笑を組んだ薄い唇から零細な声音が落ちる。脳が痺れる感覚と
いうのは、かくも心地良い。

十分な間を持って、急かす風でもなく、カルラ「クリステイは再び口を開いた。

「あいさつくらい、するものでしょ？」

指摘されて我に返る。

「こんばんは」

笑顔を返してはみたが、エリヤの頭の中は正直、混乱していた。

ジントニツクで喉を潤そうとグラスを持ち上げ どうせバーチャル空間。潤うわけがなかった。

「以前」

グラスを置いて空咳。

「以前に一度、会ってるよね。こうしてまた会えるなんて」「そうかしら」

顔の高さに持ち上げたグラスを、カルラは見つめながら、

「私、あなたに会った事なんてないわ」

「いや、そんなはずない。会ったよ」

だからこそ、ケリー「コストマンは彼女を探していた。

「会ってないわ。初対面よ」

グラスを揺らす彼女の手の中、氷が涼しげに躍る。

「はあ？」

今すぐケリーに問い詰めたい気分だった。彼女の微笑はウソをついているようには思えない。

ウソ。

「……きつと、忘れてるんだよ。何せ一度しか会っていないから」

小首を傾げたカルラは試すように目元を細め、

「奥で話さない？ あなたとはゆっくり話してみたいわ」

思わぬお誘いを断る由などない。快諾したエリヤはグラスを持って立ち上がった。

フロアの奥は、突き当たりの壁を左に折れる形で広がっていた。

テーブルとソファのセットが4つほどある、エリヤが想像していたものよりも広い空間だった。最も奥に位置したソファに腰を下ろしたカルラは、テーブルを挟んで向かい合うソファに促し、開口一番

「成り済ましはペナルティの対象よ」

柔らかい口調で足を組んだ。

「何の事かな？」

すつとぼけるのはエリヤの得意分野だった。カルラがつなぐ言葉に注意しつつも、頭の中で己が言動を振り返る。

どこでバレた？

どこかでボ口を出さぬように、細心の注意をしたつもりだ。迂闊

な発言は抑制したし、何より、外見はケリー「コストマンそのものだ。一度しか会ってない 本人は否定するが カルラに、中味がエリヤだと判別する術はない……はずだ。

「成り済ましは発覚され次第、成りすませた人間にもペナルティは適用されるの、知ってる？ あなたが無理やり成り済ましたのであれば、ケリー「コストマンには適用されないんだけど」

「俺の名前、憶えてくれてるんじゃないか」
「あなたの名前ではないでしょう？」

「誤解だよ」

エリヤは躊躇せずに断言した。

「どこで勘違いしたのかわかりませんが、俺はケリー「コストマン」の他の誰でもない。そんな話をするためにここに？」

「ええ、そうよ」

「ならば、それは徒労だよ。教えてくれないか？ どこで誤解を招いてしまったのか、気になってしょうがない」

「どこで、とかそういう話じゃないの。あなた自身が一番知っているはずよ。あなたがケリー「コストマン」じゃないのは事実だもの」

「俺がどんなに否定しても？」

「事実がそうなんだから」

「ケリー「コストマン」だと証明する手立ては？」

「あつたとしても、証明できる？」

「できるから聞いているんだけどね」

カルラは小さく頭を振った。

「無理ね」

顔の造形の整った微笑で否定を断言されるのは、いささかダメーシが大きい。

彼女はグラスを置くと、人差し指を立てた。

「これは忠告よ。痛い目を見たくないのなら、早々にLovers Barから出て行った方がいい。システム管理者が成り済ましを知られば、事は大きく膨らみかねないわ。ユーザーが資産家たちな

だけに、信用が大事な。わかるかしら？ たった一つだけの成り済ましだけで信用はたやすく揺らぐ。話していた人がまったくの別人だなんて知ったら、気味が悪くて出入りしたくないでしょ？」

「……たしかに」

「だから、早々に出て行つた方が賢明よ」

「あなたは、管理者側の人間？」

カルラの忠告とやらを流しつつエリヤは尋ねた。細く整えられたカルラの眉が上がる。

「どうして？」

「成り済ましに対して、酷く厳しい印象を受けたもんで。勘違いだつたら失礼」

「勘違いよ。会員じゃないのに会員面してる人が嫌いなだけ」

「わかりやすいね」

「非合法な人が混じつてると、合法な人たちは安心できないでしょ」

「……」

自身の中で渦巻いた衝動を何とか緩和させる。目の前で絶えず微笑を湛える女。その容姿、その声音、その居住まい。

「あなたは」

己が体温の、すつと 下がる感覚。

「 どうしてここにいるんだろう？」

「成り済ましてるあなたでもわかるんじゃない？ Lover's

Barは様々な人間が集まる場所よ。話し相手には事欠かないわ」

エリヤは、自分が力強くグラスを握っているのに気付いて、テーブルに置いた。

「そういう事じゃない。そういう事を聞いてるんじゃない」

うめくように呟いた彼に、カルラの双眸が胡乱を帯びる。

「何かしら？」

「違うんだよ。Lover's Barにいる理由じゃなくて、もっと根本的な、基本的な事を聞きたい」

「いまいち、言ってる事がわからないわ」

「あなたの名前は？」

カルラの語尾を掻き消すように、早口に問うた。不意を突かれて数回瞬いてから、カルラは失笑まじりに応えた。

「カルラ」クリステイよ。ケリーさんから聞いてるんじゃないの？」

「生まれは？」

矢継ぎ早に質問する。

「いきなり、何？」

微笑は完全に失笑にシフトした。エリヤ自身、カルラ的心情はわかる。唐突に威圧的な早口で問われれば、誰だって気分を害するものだ。しかしながら、今のエリヤはそんな事になど構っていられたかった。

「生まれを聞いてるだけだよ」

「……………グリーンクレスト」

失笑も越えてため息と化す。

「いい街で生まれたね。以前、何度か行った事がある。山脈に囲まれていて、空気も景色も綺麗な街だ」

「どうして、そんな事を聞くの？」

カルラの表情は、眉を寄せて警戒すら感じさせた。エリヤの口調は、自分でも驚くほどに軽快だった。
「あなたがカルラ」クリステイなはずがない」

08:「プレゼント」

シー・ド・ルシールは、避暑地としてその名を知られている。季節が来れば浜辺は賑わい、海の幸は人々の舌鼓を打たせる。多く集まる観光客によって、日常的にも陽気な街の空気は、より陽気に活気付く。

市場は喝采、海は煌めき、空はどこまでも蒼く。

毎日の天気予報が、今年一番の暑さと謳う街で、男と女は出会った。

男は、ただ街を歩いていた。所在無く、その季節特有の、儂くも確固たる喧騒にうんざりしながら。

女は、広場でアクセサリーを売っていた。シルバーと石を組み合わせた自作のそれを、敷いた絨毯に並べて。

2人を引き合わせたのは、突然の豪雨だった。

厚く重量感を伴った雲が太陽を隠し、大粒の雨を激しく降らせた。喧騒で賑わっていた広場は一変、慌てふためく人波となった。

男は近場のレストランの屋根に身を寄せ、右往左往する人々を皮肉めいて見つめていたのだが。

アクセサリーを慌てて掻き集める女を見て、男は飛び出した。

「ありがとうございます」

アクセサリーを集め終え、レストランの屋根に引き返すと、女は礼を言った。

「お礼に、一緒に食事をさせてください」

男は、そんな大それた事をしたつもりなどなかった。断わる男に、しかし女は引き下がろうとしない。

押し問答の末、男は折れた。

「1人で食べるよりも、相手がいた方が食事は楽しいですよね」
女との食事は、実際、楽しかった。

気まぐれな豪雨は一向に止む気配を見せない。

元より目的なく歩いてきた男にとって、暇潰しには勿体ない食事。

「1人旅？」

女は、この街の人間ではなかった。

「そう。アクセサリーの学校に通ってるんだけど、夏休みは作品の構想を練ったりで、長く用意されてて。せっかくだから見知らぬ街に行きながら、自分で作ったアクセサリーを売ってみよっかなって」
食事を終えて、女の作品を見せてもらった男は感嘆した。

ピアスにリングにブレスレット。

どれも精巧で、女のデザイン・製作力を実証していた。

「これ、似合いそう」

男の手を取り、その人差し指にはめたリングは、地球儀を模したデザインだった。

普段アクセサリーなど身に付けられない男でも、それは気に入った。

「プレゼント」

食事だけでなくリングまでもというのは、さすがに気が引ける。

「いいのいいの。お礼だから」

頑なに拒否する女に、男もまた頑なに紙幣を渡した。

次に折れたのは女だった。

それから、男は女と話し続けた。

雨が止むのも構わず、話し続けた……

女は、それからも広場でアクセサリーを売っていた。

日常を主に暇を持って余して過ごす男は毎日のように広場に通い、女と話を交わした。それが日課になっていた事に、男は敢えて言及しなかった。

「このオルゴールも自作？」

地面に敷いた絨毯に並べたアクセサリーの真ん中に鎮座するオルゴール。

女は、銀細工で百合をあしらった箱を手に乗せ、蓋を開く。

透き通った音色が遠くの潮騒と交わる。

「これはお父さんが作ったんだ」

聞けば、女の父親はオルゴール職人だった。

街の人間に愛されるオルゴールを作る、女自慢の父親。

「私がアクセサリーの道に進んだのも、お父さんの影響」

オルゴールの奏でる曲を、しかし男は知らなかった。

「知らないのも当然だよ。私の街にある子守唄だから」

瞳に映る空の蒼で

鳥たちが歌っている

貴方の笑顔に安らぎを

貴方の寝顔に祝福を

私たちの愛しき御子

籠に揺れる宝物よ

お眠りなさい

お眠りなさい

オルゴールのメロディに乗せた女の歌声は、涼しく澄んでいた。

「綺麗な唄だ」

男が拍手を贈ると、女は照れ笑いを浮かべたのだった。

「オルゴールなんて、まとも聞いた事がないんだよ」

そう言う男に女の瞳は丸く瞬いた。

「ほんとに？ どうして？」

オルゴールなんて、所詮アンティーク。

そう認識していた男からすれば、オルゴールに対する女の熱弁は

尊敬にすら値した。

オルゴールの精密な構造を。

職人が打ち込む想いを。

寂しげで、しかし心に響く確かなメロディーを。

女は大いに弁を振るい、

「少なくとも、タバコよりは健康的よ」

男がくわえたタバコを奪い取り、微笑んでへし折ったのだった。

男は、女に恋をした。

男は、左右の目の色が異なっていた。

不思議に思った女が尋ねた事がある。

「どうして目の色が違うの？」

黒い左目と、深い緑の右目。

「遺伝子の気紛れだよ」

「綺麗ね」

「そうかな」

「とても綺麗」

女は目を細めて笑った。

「左右の色が違うって事は、左右の景色が違うって事よ」

表情は冗談めいていながら、その口調は確信めいていた。

その言葉の意味を、男は知りたかったのだが。

女は曖昧に微笑むだけで、とうとう教えてくれなかった。

突然に。

忽然と。

女は姿を消した。

散歩の日課。

人差し指の指輪。

恋心。

それらだけが、男の手元に残った。

09:「ひと目惚れ」

「寂しい男の、物憂げな物語」

そう締め括ったキアへ、ルコが割れんばかりの拍手を贈った。

「ロマンスねっ」

湿った声で称える彼女の感覚に同調できる人間は、その場に居合わせてはいなかった。閉店後のAnnyフロアの中央で、語り切つて悦に入っているキアと、その彼を窓際のテーブル席から殺意を込めて睨み付けるエリヤと、そのエリヤを向かい側のイスで呆れて見つめるステファニー。

カウンター席のルコが鼻をかむ音が、やけに響いた。

ステファニーのため息。

「……………女々しい」

「どこが」

「昼間に意味もなく歩き回っていると思つてたら、なーんだ、女を探してたんだ」

鼻で笑う。

「なーんだ」

エリヤは頭に血が上るのを自覚した。

「そんな事言つたらダメよっステフ！」

髪を振り乱さんばかりに、キアが非難する。

「男は恋をする生き物なの！ それを受け入れてもらえない時の悲しみは、それはそれは深いものなの！」

「ばっ！ と、エリヤに向けて腕を広げる。」

「さあ！ 私の胸で泣いて！」

「誰が泣くか」

「ま、これがエリヤ＝マルソーとカルラ＝クリスティのラブ・ストーリーってわけだよ」

ずいぶんと長く悦に入っていたものだ、その場に屈みこんだキアはあぐらを掻いた。

「そこで、ステフに質問」

自分の膝で頬杖をついた彼は、相も変わらず眠たげな眼でステファニーを見上げた。

「この話からわかる事は？」

「カルラ」クリステイは、Lovers Barには不釣合いな身分にあるって事？ Lovers Barは資産家たちのための場だもの。彼女はオルゴール職人の娘であつて、資産家の生まれじゃないわね」

逡巡する間もなく振り返ったステファニーは、さも当然そうに答えた。

「」名答」

寝ぼけ眼で拍手しても、相手を小馬鹿にしているようにしか見えない。ステファニーはキアの拍手がそうではないと知っているだろうからいいものの。

しかし、室内にも関わらず、コートはきっちり前も閉じ、マフラーもしっかり巻いているキアの服装は如何なものだろうか。Annの室温は、防寒していなくてはならないほど寒くはない。むしろ暖かい方だというのに。

「けど」

エリヤに向き直った彼女は、予想通りの質問に口を開いた。

「それじゃ、どうしてLovers Barにいたのよ？」

未だ泣き崩れているルコを眺めていたエリヤは、鼻梁を掻きながら従順に答える。

「ニセモノだった。そんだけ」

「んー」

腕を組んだステファニーはいまいち合点がいかないらしく、意味もなく天井を見上げ、

「どうしてカルラ」クリステイなの？ ニセモノとして偽ったとし

ても、身元がわかればすぐにバレる事じゃない？ 利口な人選とは思えないんだけど」

「んーと」

どう答えればわかりやすいだろうか？ エリヤは、テーブルのコーヒーを飲んで頭の中を整理しようとした。酸味を舌でじっくり味わいながら、何の気もなしにキアを見る。どうやらそれを、助けを求めていると誤解されたらしい。

「根本から話したらいーんじゃない？」

カルラとの経緯を暴露した殺意はあっても、助言を求めた気など毛の先程もなかったのだが、それは至極もつとも。

「根本？」

首を傾げたステファニーに、エリヤはその根本とやらを示す事にする。

「カルラ〓クリステイを偽ってる人間なんて、どこにもいないんだよ」

「……………は？」

「頭悪いヤツを見るような目で見んな」

「たった今、カルラ〓クリステイがニセモノだって言ったじゃない」

「ああ、ニセモノだ」

「なのに、偽ってる人間がいないってどーゆ事よ？」

ステファニー、何故か半ギレ。

めんどくせー。

エリヤの本心。

「だからー」

割って入ったのは、キアの伸びた声。ステファニーが横目で彼を捉える。彼女の不機嫌な眼差しを受けたところで、気圧されるほどの神経は細くない。むしろ凶太い。平静に視線を受け返し、顔の横で両手を広げる。

「Lovers Barと同じよーに、カルラちゃんもバーチャルなんだよ」

ここで、ステファニーの目は点になった。

「元よりバーチャル世界なんだ、バーチャルな人間がいたって、一見どころじゃわからない」

言って残りのコーヒを飲み干し、エリヤは席を立った。

「つてなると……」

おもむろに裾を取られ、危うくテーブルを倒しそうになりながらも振り返る。

「ケリー」コストマンにはなんて報告すりゃいいのよ？ 『あなた
の一目惚れは幻でした』つて？」

「うまい事言うじゃないか」

「あの人、それで納得する？」

「ご愁傷様って付け加えたほうがいいかもな」

裾をつかむステファニーを振り払って、カップを取ったエリヤはカウンターへと向かった。鼻をかむルコの背後を回ってカウンターの中へ。コーヒーマーカーからポットを手にし、カップに注ぐ。

「人探して言うから大して苦労せずに済むと思ってたのに」

独り言を呟きながらステファニーは、その小さな頭を抱えた。

「まさか現実には存在しないだなんてっ」

おまけに仰け反る。

「ま、現実には存在しない人間だろうが、頼まれた仕事はこなしたんだから文句は言われないうだろ。いや、文句は言うかも知んないけど、人探しは果たしたって主張はできる」

湯気の立つカップを口に運びながら、エリヤ。

「あちっ」

存外、熱かった。

「主張できたって、受け入れてもらえなきゃ無意味なのよ、エリヤ
うめくステファニーの語調は呪詛に近い。

「ああ、500万が飛んでゆく……」

「12歳らしからぬ発言だね」

けらけら笑うキアを、ステファニーが睨んだ。

「 けど、エリヤ」

意外な方向から呼び掛けられたせいで、エリヤは内心戸惑ってしまった。表情にまでは出ない、小さな動揺ではあったが。ルコは、涙をかんだ後にテーブルに転がしたティッシュを指先で突付きつつ、泣き腫らし充血した目でカウンター越しのエリヤを見上げた。

「カルラ＝クリステイさんが仮想空間だけの住人だっていうのはわかったんだけど、どうして彼女が造られたのかがわからないわ」

ロマンスとやらにあれだけ泣いておきながら、すっかり話は聞いていたらしい。ルコ＝マーレイ 単なる感動屋とは一味違う。

「Lover's Bar」ってのは、維持費が高額だったりするんだよね。会費を回収してはいるけど、利益を出すには至ってない。

サービスを開始してから日が浅くて、まだ会員が少ないってのもあるんだけど、ほとんど赤字続き。そういう事態はあらかじめ予想していた事だと思うよ。何せ一切の宣伝手段を用いていない、口コミだけで展開してるサービスだから」

「……俺が説明を求められたんじゃないのか？」

用意していたのかと勘繰ってしまうくらいに、滑らかに話すキアを冷ややかに見据えたエリヤは、

「そこで登場、カルラちゃん」

あっさり無視された。

「彼女を、ある種アイドル的存在にしたんだよ。カリスマと云ってもいいけど、客寄せみたいなものだね。Lover's Barにとびっきりの美人がいるって話が伝われば、集客が上がるだろうって魂胆。会員も増えて会費も集められるし、そうすれば純利益も発生して来るでしょ？ ステフは知らないだろうけど、カルラちゃんには週初めにしか現れないんだ。会員であるしさんかさん方は大体、週末にしかLover's Barには来店しない。わざとずらしたんだよ。目にした事のない美人を人伝に聞く事で、期待や神秘性を上げたんだね」

キアの言葉が理解し切れないようで、首を傾げたステファニーに

端的に告げる。

「男心をくすぐったの」

「そういうもんなの？」

と聞かれたが、エリヤは肩をすくめただけ。キアの言葉が　カ
ルラ＝クリステイのシステムが、すべての男に当てはまると考えら
れても困る。

「できるなら、ステフ。ケリー＝コストマンには真実を伝えない方
がいいかも。言ってしまうえばイカサマなんだから、ヘタに口外され
ちゃったらLover's Barの信用度は落ちるし、運営者に
逆恨みされかねないからね。『あまりのガードの硬さに根負けしま
した』ぐらいでいいんじゃない？　カルラちゃんはきつとこれから
もLover's Barにいるだろうし、落とすんならケリー＝
コストマンに任せればいいだけで、ステフやエリヤの問題じゃない
んだから」

エリヤには、キアのこのやわらかい口調を真似する事ができない。
聞き手を包み込んで懐柔してしまう口振りと声音。殺し屋ではなく、
交渉人になるべきだと思う。

カラランツ

カウベルが鳴るや、全員の視線がドアに集中する。冷え込んだ夜
気を従えて現れたのは、聡明な青年だった。年の頃は20〜22と
言ったところか、顔立ちを見るに、東洋の生まれに思える。薄いブ
ルルの縁のメガネを手の甲で持ち上げ、軽く頭を下げる　礼つて
ヤツだ。

「こんばんは。あの……ピアノの面接で来たのですが」

顔立ちとは反して、流暢な言葉遣いだった。

「いらっしやい。待ってたわ」

すつと立ち上がったルコが、注目されて戸惑う青年を迎え入れた。
「シツヤさんよね？　外は寒かったでしょ。東洋からの留学生には、
この街の寒さは堪えるんじゃないかしら。今、温かいスープを用意
するわね」

ドアに近いカウンター席に彼を促し、自分はキッチンに入る。未だキッチンにいたエリヤの尻を叩いて、

「彼、音大生なんですって。ピアノの生演奏のある店って、素敵でしょ?」

コンロに乗せていた鍋から、マグカップにスープを注ぐ。オニオンの香りが鼻先に触れた。

「……………あのピアノは、いつ買ったんだ?」

気にはなっていた。見慣れたホールの奥に我が物顔で鎮座する、見慣れないもの。黒く磨き上げられたボディに独特の曲線。確固たる存在感で持ってたたずむそれは、幻でなければ 紛う事なく、グランドピアノ。

「一昨日よ。グランドピアノがあるってだけで、こつも空気が変わるものなのね」

にこやかに応えてくれるのはいいとして。

「……………また衝動買い?」

キッチンから青年にスープを出すルコの顔は、上機嫌に笑んでいた。

「ひと目惚れ」

ずいぶん高価なひと目惚れなもんだ。

「これからピアノ弾いてもらうけど、エリヤも聞く?」

うんざりした顔をしたところで、ルコには微塵も影響を及ぼすわけがなく。

ルコ＝マーレイ 単なる浪費家とは二味も違う。

「いや、俺はいい。部屋にいるわ」

「ルコ。私にもスープをちょうだい」

カウンターに駆け寄ったステファニーが、ルコにねだった。どうやらピアノを聴きたいらしく、その双眸は好奇心に輝いていた。早速、その矛先を青年に向ける。

「んつと、シツヤさん? は、どんな曲を弾くの?」

留学生への配慮だろう、聞き取りやすいように遅めのリズムで話

しかけた。

「初対面の人には自己紹介が先よ、ステフ」

ルコがたしなめた。

「私、ステファニー」モロゾコフよ。よろしく」

「よろしく」

差し出された小さな手を握るシヅヤの手はまるで女のそれで、指は細く、長かった。

「大学ではジャズを専攻してる。クラシックやポップスも弾けるけど、ジャズが性に合ってるから」

「いいわ」「いいね」

ルコとステファニーが、そろってうつとり目を細めた。

「エリヤ」

二人の表情を呆れて見たエリヤを、呼んだキアが緩慢な動作で腰を上げる。

「俺も、部屋に上がってもいい？」

「もちろん。何も無いトコだけだな」

「知ってる」

苦笑もせず、代わりにキアは両手を突き上げて伸びをした。愛想なんて言葉が似つかわしくなく響いて消えるキアだが、何故か何故だか、他人からは良く好かれる。ステファニーにしろルコにしろ、キアはすぐに打ち解けてみせたのだった。それがキア「カティリヤのコミュニケーションツール　そんな事を、エリヤはふと考えた。

「さくむっ！ 凍死するかと思った！ エリヤ、どうしてすぐ入れてくれないのよ？ 朝になって、私の凍死体があったらドン引きするでしょ？」

早口でまくし立てながら飛び込んで来た女は、勝手にガスヒーターのスイッチを押した。

「死にそうになるくらいなら、どうして下から入って来ない？」

「ま、それはそれ」

「どれがどれだ」

「普通に来たところで、普通に迎え入れるでしょ」

「普通でいいだろ」

「普通じゃ、女は満足しないのよ」

妖艶な顔をして、その下はガスヒーターの前で屈み込んでいるのだから、まったく滑稽だ。

マフラーに手袋にダウンジャケット、背中まで伸びる青みがかつた黒髪、東洋の血の混じった顔立ちは男の目を引く事請け合いのまっとうな美人なのだが、長時間窓にへばり付いていたせいで、鼻頭が赤い上に溼というオポジション付き。豪華にデコレーションされている。

「だからって、ベランダによじ登ったのか？」

言つてて馬鹿馬鹿しくなる。

「そんな醜態、さらすまでもないって」

その醜態でよく言えた言葉だ。

「向かいにマンションがあるでしょ？ その外壁を蹴れば、2階のベランダなんて届く高さなもんよ」

冷え込んだスリムな体を抱くように震える女は、その語調も震えている。しゃがみ込んで畳み込まれた足はデニムパンツと膝までのブーツ。到底、そんなアクロバットをこなせるような服装ではない。

「そう思ってるのはお前だけだよ」

「こんばんは、シスター」

いつの間にかベッドに腰掛けていたキアが悠然と挨拶する。背後

からの声に、女は首をねじって振り返ると、あら、と眉を上げた。

「キアも来てたの？ ゴメンゴメン、気付かなかったわー。元気してんの？ 体の方は平気？ 完治した？」

肋骨3本と左腕の話だと、すぐにエリヤは察した。

「にしても 早く動かんのか、このポンコツは！」

女 ハルネが睨んだせいかわからないが、やっとこさヒーターが動き始める。温風を吐き出す機体の頭を小突いたハルネは、

「怒られたくないなら、始めから素直に動きなって」

機会に声をかけた。

「それで？」

ダウンジャケットを脱ぎ始めたハルネに声をかける。彼女は二重の瞳を丸くし、エリヤを見上げた。こうして見る限り、キアの肋骨・左腕を破壊するような女には見えない。

人は見かけに寄らないもんだ。

エリヤは、我ながら変なところで感心した。

「何？」

「散歩してたわけじゃないだろ？ 凍えるような寒さの中で歩き回るような酔狂には思えない」

「私だつて夜に散歩したくなる時だつてあるし、ついでにエリヤを尋ねたくなる事くらい、あつてもおかしくないでしょ？」

「あるかもな。で、今回もそうなのか？」

「今回は、カルラ「クリステイ絡みの話を聞こうと思って」

ダウンを放り投げたハルネは、床に尻をつけてエリヤに体を向けた。

「結局、本人じゃなかったわけでしょ？」

彼女の問いに肩をすくめて肯定。

「私なりに首を突っ込んでみたんだけど エリヤ。 Lover」

s Barでの事、話してもらっていい？」

ハルネに話をするのは初めてだった。ケリー「コストマンの話」(愚痴を零そうとしたら睨まれた)から、ケリーがエリヤとは別に力

ルラ「クリステイ探しを頼んでいた男の話、不必要とは思いますが、男をはべらす女の話」

「それ、私だわ」

いとも平然と言うものだから、危うく聞き逃すところだった。

「……は？」

「その女の事。男をはべらす女つてやつ。いや、別に男目的でLovers Barにいるわけじゃないんだよ。情報源の確保って言うか、コネクションの構築のために」

「ハルネ、会員だったのか？」

「え、意外？」

「情報集めならわかるけども、金かかるだろ？」

「仕事に不自由してないおかげで、財政面はウルウルよ」

ハルネを動かせるには多額な報酬を必要とする。仕事の内容は様々といえど、クライアントが金を惜しまないような仕事ばかりだから収入は大きい。加えて、ハルネ本人は貯蓄家ときている。Lovers Barの会員費は例外として。

「続けて」

納得して、エリヤは最後まで話し切った。

「以上」

「んー」

天井を見上げながら、ハルネの鼻がうなった。

「これは話してよいものかわからないけれど、エリヤを信用して話そっか」

どこか遠回りでもつたいぶった口調に、エリヤは何も応えなかった。拒否もしなければ受容もしなかった。

「エリヤがLovers Barで話した男　クロナア「ディーン」ってんだけど　そいつがすべての起因よ」

まるで世間話をしているかのように、あっさりと。

「女好きなプログラマーでね、本人とは私自身、面識があるんだ。

Lovers Barでなく、現実世界での話よ？　カルラ「ク

リステイを知ってるエリヤに対して、自分がプログラムの一部だつて白状したのはニセモノ本人だけど、製作者であるクロノア「ディーン」に関しては何も聞いてない」

その語尾はどうやら確認だったらしい。眉を片方だけ上げてエリヤの目を覗き込む。

「ああ、聞いてない。聞いたところで何も無いしな」

「だろうね。エリヤが知りたかったのは、カルラ「クリステイを偽ってる何者かって点だけだものね。そこに至る経緯なんて興味なかったんでしょ」

正しくご明察だった。カルラ「クリステイの現状を知った 知ってしまった 以上、Lover's Barのカルラ「クリステイがニセモノだと確信したエリヤの興味 と言えるほどやわらかくなく、むしろ瞋恚に近かったが は、その正体だけ。バツクグラウンドなど知った事が。

「言ってしまったえば、クロノアもエリヤも同じようなもんよ。あんたにすりゃ不愉快かもしれないけど、カルラ「クリステイに惚れたという点で同じ男。ただ、クロノアの場合はそれが歪んでしまったっただけ。何せ、自分のテリトリーに自分のイメージでのカルラ「クリステイを創ったのだから」

そのせいで、両者の間にイメージの相違が生じた。

「カルラ「クリステイをミステリーな存在に仕立て上げたのもクロノア自身。もしかしたら、独占欲もあるのかもね。その存在を客寄せの商売道具にしようと考えたのは、クロノアじゃなくて運営会社の方よ。あの男が率先的に惚れた女を客寄せにしようなんて、考えられたもんじゃないわ。んで、ジントニツクのオーダーをコマンドとして、カルラ「クリステイを出現させるようにしたって寸法。もちろん、ニセモノだから正体が判明してしまうわけにはいかない。名前しかわからない幻の女って立ち位置と、どんな男に口説かれようが口説き落とされないようにプログラミングしてしまえば、そこはカバーできる」

プログラムであるカルラ「クリステイから見れば、Lover's Barはプログラムの塊だ。正規の会員ではないと看破するのは容易なのだろう。サイズの違う服を着ているようなものなのだから。」

「そのクロノアって男は」

エリヤは口を開いた。ちょうど階下からピアノの音色が流れ始める。しっとりした、爽やかなジャズ。聴いていて落ち着くメロディ。シツヤと言ったか、青年の腕前は大したものだ。

「カルラが死んでる事を、知ってたんだな」

「もちろん」

ふとベッドを見れば、キアはその身を横に倒して眠っていた。

「不幸な飛行機事故よ」

「ああ……不幸な、な」

自分の声が落ち込んでるのがよくわかる。あの笑顔は二度と見られない。

「おまけに言えば」

対照的に、ハルネの言葉は明るかった。

「来春、ブランドが立ち上がるわ。カルラ「クリステイ」のデザインしたアクセサリーを取り扱う、『Carla』ってブランド。早くも予約が殺到してるみたい。そのリング」

唐突に彼女に指差され、エリヤは視線を落とした。左手人差し指、地球儀を模したリング。

「大事にしなさいよ。デザイン画の存在しない、唯一のリングなんだから」

彼女が励ましてくれているとは思えないが、それが返ってエリヤの沈む気持ちを楽しませてくれているのは、たしかだった。左手を顔の高さまで持ち上げ、リングを眺めてみる。久し振りに付けたリングは指にしっくりきていて、繊細でありつつ豪快なデザインは巧妙。

「若き才能を認められたデザイナー、その幻のリングを持ってみて

感想はどう？」

リング越しにハルネが微笑する。

微笑　カルラの微笑。

女の微笑に弱いと知ったのは、カルラと出会ってからだ。

「……………どこにでもいる、学生だったよ」

呟いたエリヤの言葉が聞こえたのかどうか　ハルネはタバコをくわえ、ジッポで火を付けた。目を細め、実にうまそうに煙を吐く彼女を見て、エリヤは手を差し出した。

「……………俺にもくれ」

「やめたんじゃないの？」

ハルネはからかうように笑みながら、箱から抜き出したタバコを器用に指で弾いてみせた。手の平で受け止めたタバコを口にして、彼女の付けたジッポの火に顔を寄せる。ジジジ　タバコの先が焼け、久し振りに肺に入れた紫煙は

ベッドではキアの寝息。

カキンツ　ハルネが閉めるジッポ。

シヅヤの奏でるピアノ。

2人分の紫煙が昇る天井。

脳が痺れ、少しだけ、胸が痛い。

指にはリング。

少女の笑顔。

悪くない。

「タバコをやめる理由がなくなっちゃったからな」

「けど、残念ね」

ハルネの唇から、煙の輪が浮かぶ。

「会ったら最初に言う言葉、せっかく用意してたのに」

「そんなのあったっけか？」

そらとぼけるのは、エリヤの得意分野である。

Smokin'with JAZZ

• d n E

『Smokin' With JAZZ』あとがき

こんにちは or こんにちは。nakosoと申します。

この度は『Smokin' With JAZZ』に最後までお付き合いただき、まことにありがとうございました。

人探しを題材としました本作、読者様方にはどのように映りました事やら。

本作は、とある『出会い系』の話です。nakoso風味をブレンドしましたところ、こういった出来上がりになりました。

nakoso作品がどのようなものか、伝わりやすい作品であれば良いのですが。

小説とは不思議なもので、頭から零れた、ほんの少しの妄想が物語性を伴って現れてくれるものなんだと、本作執筆中に実感しました。

もともと、妄想が膨らむためには相応の熟成期間が必要なものと割り切った上での実感なのですが。

作者としましては、今後もシリーズとして描き続けたい作品であります。

本作では紹介程度でしか登場していないキャラもいる事ですし、彼あるいは彼女らをめいっばい暴れさせるのが作者の務めだとも勝手に考えていたり。

当初より考えていた展開には何一つ触れていなかったり。

エリヤを始め、彼を取り巻くキャラたちの今後の行く末をご一緒させていただければ幸いです。

それでは、最後になります。

まだまだ未熟者ゆえ、お見苦しい点が多々あるかと思えます。それでも最後まで読んでいただき、ましてやこの『あとがき』にまで目を通していただいている読者様方に、改めてお礼を申し上げます。次の物語で、また貴方とお会いできますように。

n a k o s o . ♪

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2094d/>

Smokin'with JAZZ

2009年3月24日09時37分発行